

訓詁学研究(五)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福満, 正博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5182

訓詁学研究(五)

福 満 正 博

本稿は筆者の基礎研究の一つで「訓詁学研究ノート」(一)(二)、「訓詁学研究」(三)(四)の続きである。

本稿では文法関連について取り扱い、手はじめに処置式或いは「把」字構文と言われるものを取り上げ、その学説史をまとめ考察することを目指したものである。

叙述の中の例文が多数の場合、基本的に最も古い最初の例文を取りあげて、あとは省略した。

(一)

王力 『中国語法理論』(1944年)

第二章第十二節 「処置式」

『中国語法理論』は王力の初期の文法に関する著作で、『中国現代漢語』(1943)と前後して出た。本人の弁に拠れば後者は漢語語法の規則について、前者はその規則の出てくる理論について述べたものである。当時は Jespersen や Bloomfield, Vendryes などの影響を受け、特に Jespersen の“三品説”に影響されたと述べている(『中国語言学史』)。この第二章造句法(下)の第十三節 処置式で、以下のように述べている。

王力は「把」字を、単に目的語を動詞の前に移動させたと解釈するのは誤りとする。

それで次の五つの場合は「把」字を使えないとする。

- (1) 述語動詞が表すものが、精神的行為である場合。
- (2) 述語動詞が表すものが、感覚視覚現象の場合。
- (3) 述語動詞が目的語の事物に対し、その状況を変更できない場合。
- (4) 述語動詞が一種の意外な遭遇を示す場合。
- (5) 述語動詞が「有」「在」などの場合。

これにたいし、“execution form”とも呼ぶべき処置式は近代の特殊な産物で、以下の条件が必要であるとした。

- (1) 述語動詞の後ろに、補語を使って結果を示すこと。
- (2) 述語動詞の前か後ろに、場所を表す「末品謂語形式」(述語フレーズ、介詞フレーズなどの意味)があること。
- (3) 述語動詞の後ろに「目的位」(目的語)(『中国語法理論』では、実際には「関係位」と記している。しかしこれは副詞のような働きをする状語の意味であり、不適切なように思われる。『中国現代語法』では同じ例文を使って「目的位」と説明していて、これは目的語のような意味なので、この方が適当のように思われるので、訂正した)があること。
- (4) 述語動詞の後ろに、数量補語があること。
- (5) 述語動詞が、時態助詞と結合したもの。

最後に簡単な処置式の歴史を述べるが、それは次の章の『漢語史稿』のほうで詳細に述べられるので、省略して述べない。

(二)

王力 『漢語史稿』(1957, 1958年)

第47節「処置式的産生及其発展」

『漢語史稿』は中国語の音韻・文法・語彙について、1957年から1958年にかけて上、中、下三冊で出版された。これは後に『漢語音韻史』(1985年)、

『漢語語法史』、『漢語詞彙史』として改訂・出版される。しかし後世への影響から考えて、ここでは『漢語史稿』中冊、第47章「処置式的產生及其發展」を取り上げる。ここでは「將」字は、「把」字と同じであるとして、まとめて取り上げてある。

「將」も「把」も唐代以前は純粹の動詞であった。

無將大車 祇自塵兮 (詩經, 小雅, 無將大車)

(車を引くな, ただ自分が汚れるだけ)

禹親把天之瑞命, 以征有苗 (墨子, 非攻, 下)

(禹は自分で天の命令を持って, 有苗を攻めた。)

唐代以後も「將」「把」は, 純粹の動詞としても用いられる。

將炙啖朱亥 持觴勸侯嬴 (李白701~762, 俠客行)

(肉料理を持って朱亥に勧め, 酒盃をささげて侯嬴に勧める。)

また次のようなものは緊縮句である。

明年此會知誰健 醉把茱萸子細看 (杜甫712~770, 九月藍田崔氏莊)

(来年のこの登高の会までに誰が元気であるのか, 酔ってハスを取ってみんなをじっと見た)

詩句無人識 應須把劍看 (姚合781~846, 送杜觀罷舉東游)

(君の詩は人に知られていないけど, やはり劍を握って読むべきだ)

実際に持つという動詞の意味である「把」の字が、「看」という字に対して従属的であり, 虚詞の方向へ向かっている。

莫愁寒族無人薦 但願春官把卷看 (杜荀鶴846~904, 入關因別舍弟)

(寒門の出身で誰も後押ししてくれなくても心配しない, ただ礼部の試験官がちゃんと答案を見してくれるのを願うだけ)

前の詩の「把劍看」の「看」の目的語は「詩句」であったのに対し, この詩の「把卷看」の「看」の目的語は「卷」である。この段階で処置式, 「把」字句が成立しているとする。

処置式と類似したものに, 工具語がある。

直把春償酒 都將命乞花 (韓愈768~825, 游城南十六首; 嘲少年)

(ただ春を酒の肴とせんと、咲けという命を花に伝えて乞う: 王力は「乞」を「氣」に作るがそのような版本は見つからなかった。)

工具語とは、現代語の「用」「拿」に相当するもので、例文の場合、「將」「把」の目的語は状語の役割をしていて、ともに工具語である。

「將」を処置式に使うほうが、初期の段階では多かったとして、王力は次のような例を示す。尚、王力は『中国語法理論』で「將」は工具語に、「把」は処置式に使うとした説を、『漢語史稿』では訂正している。

已用當時法 誰將此意陳 (杜甫, 寄李十二白二十韻)

(もうその当時の法律で裁かれたのだから、誰も李白が永王璘の乱に加担していないことを陳述してくれなかった)

この「將」は処置式の例である。

このように処置式は七世紀から八世紀の間に成立したとし、「把」字の使用は、中晩唐から盛んになってきたとする。次の詩句はその例である。

莫言魯國書生懦 莫把杭州刺史欺 (白樂天772~846, 戲醉客)

(魯国の諸生のように役にたたないと言わないで、杭州の刺史である私を侮ってはいけません)

「將」と「把」は区別がなかったので、ひとつの対句の中で使われたりしている。また処置式と工具語も混じって使われている例もある。

莫將天女與沙門 休把眷屬惱人來 (維摩詰經講經文五)

(悪魔の波旬が化けた帝釈天に対し、連れてきた一万二千人の天女を修行者たる私に贈り物として渡さないように、お前の仲間を使って持世菩薩たる私を困らさないように)

前の「將」は処置式で、後ろの「把」は工具語である。これは敦煌變文の例であるが、水滸伝でも同様である。

(那人) 便將手把武松頭髮揪起來 (水滸傳: 32回)

(〈宋江は〉手で武松の頭髮をつかみ上げて: 「那人」は原文にない王力

の追加)

「將」は工具語, 「把」は処置式である。

軍士把鎗將秦明妻子首級挑起在鎗上 (水滸傳: 34回)

(兵士はやりで秦明の妻子の首を鎗先に掲げた)

「把」は工具語, 「將」は処置式である。

清代になると普通語の語法中で処置式と工具語の用語が分化し, 処置式には

「把」を, 工具語には「拿」を使うようになった。

便把手絹子打開, 把錢倒了出來, 交給小紅 (紅樓夢: 26回)

(〈佳蕙は〉ハンカチを開いて中のお金を取り出すと小紅に渡した)

(如何), 人拿真心待你, 你到不信了 (紅樓夢: 47回)

(なんて言う事を, 人〈柳湘蓮〉が真心で相手しているのにあなた〈薛蟠〉は信じないのですか)

上文の「把」は処置式, 下文の「拿」は工具語である。方言はそうではないが, 普通語の語法ではこの分けた使い方は厳格に守られている。

処置式の初期において動詞は, 「把卷看」の「看」のように単音節であった。しかしリズムの関係のほか, 動詞が補語を伴う場合, 「把」を使って目的語を前に移動させるのが都合がよかったので, 動詞は少なくとも「了」「着」のような一個以上の補語を伴うようになった。時代が下るにつれて動詞と補語が切り離しがたくなってきて, 動詞の後ろに補語を伴う処置式の使用が普遍的になってきた。

処置式は使成式と密接な関係があるとする。(王力の使う使成式という用語の大半は結果補語を示す。)

少なくとも宋代にはその例がある。

易得將下面許多工夫放緩了 (朱子語類17, 訓門人5)

(〈先に天理のありかを探るようなことだけをすれば〉, 基本的な努力をほっていい加減にしていまいやすくなる)

また小説戯曲中にも多い。

次の二例は結果補語の例である。

把一天來的好事都驚散 (董解元西廂記, 卷1)

(〈紅娘が急いで鶯鶯の前にやってきたので〉, 大きな好機もびっくり台無し)

你把我老子藥死了 (元曲, 寶娥冤: 2折)

(お前〈寶娥〉は, おいら〈張驢兒〉のおとっちゃんを毒殺したな)

次は様態補語の例である。

小的每, 把這禮物擺的(得)好看些 (元曲, 救風塵: 2折)

(ものども, このプレゼントを見栄えよく並べよ)

次は数量補語の例である。

把可憎的媚臉兒飽看了一頓 (董解元西廂記, 卷1)

(あの美しい鶯鶯の顔を一度飽かずに眺められたら)

このように処置式の動詞の後ろには, 普通必ず補語或いはそれに相当する成分が加えられることがわかる。

処置式は, 元明時代以後になると処置の範囲を超えて不幸な不愉快なことを表す場合もでてくる。

將那一艙活魚都走了 (水滸傳: 38回)

(〈李逵のおかげで〉, 養殖用の一艘の船ごとの魚を全部逃がしてしまった)

正是他(們)把個選事懷了 (儒林外史: 18回)

(本当に彼のおかげで, 模範解答を選び出すこの仕事をぶち壊しにしてみました: 王力が「們」を付けるのは誤り)

偏又把鳳丫頭病了 (紅樓夢: 76回)

(あいにく王熙鳳が病気になってしまった)

このような用法は現在までも続いている。

(三)

呂叔湘 「把字用法的研究」 (1948年)

原載『金陵，齊魯，華西大学中国文化彙刊』第八卷

『呂叔湘文集』第二卷

王力は、最初の『現代中国語法』の中で、処置式が使えない例として、「把」字の後ろに否定語を使うことを挙げている。呂叔湘は、現代語はそうであるが、近世の場合は違うことを例を挙げている。

今世所以悠悠者，只是把學問不曾做一件事看 (朱子語類，卷8)

(今の人がうかうかとしているのは、ただ学問をひとつの真剣なことと見ていないからである)

次に呂叔湘は、王力が『中国語法理論』で述べた、処置式が使えない五つの条件について検証する。その中の(1), (3), (4)について、以下のように反証する。

- (1) 述語動詞が表すものが、精神的行為である場合。

これに対し、次のような例が考えられるとする。

这么一来，他可要把你恨透了。

(こうなって来ると、彼は君をすっかり恨むだろうね)

- (3) 述語動詞が、目的語の事物に対しその状況を変更できない場合。

これに対し次のような例が考えられる。

把三百級阶段一口气走完。

(三百段の階段を一気に駆け登った)

- (4) 述語動詞が一種の意外な遭遇を示す場合。

王力は、「我把一块手帕拾了」のような文は成立しないとする。呂叔湘は目的語が不確定であるから成立しないのであり、次のようにすれば成立するとする。

不知谁把这块手帕拾去了。

(誰か知らないがこのハンカチを拾った)

したがって処置式を使えない条件として、残った(2)と(5)が成立するとする。

次に呂叔湘は「把」字の目的語が、特定のもの確定されたものでなければならぬことを述べる、これは省略する。

呂叔湘は処置式成立の要件としての、動詞が処置の意味を有していること、「把」字の目的語が特定性を持っていることなどは副次的なものであり、動詞の前後にある成分こそ実は重要であるとする。この動詞の前後の部分こそ、近代漢語の歴史の中で、「把」字句を発展させる積極的な意味を有していたとする。そこで動詞の前後の成分を中心に、13の文型すべてを挙げて説明する。

I 動詞の後ろに付加される成分

(1) 偏称目的語 (「偏称賓語」)

原文「偏称賓語」は適当な訳語が不明。全体として言えば、次の(2)の動量目的語の特殊な形、一種のように思われる。「把」字の目的語の名詞が全称名詞であるのに対し、動詞の後ろの目的語が、全称名詞の一部分に含まれる、またはその一部分を意味する部分称になっていることに起因するらしい。偏称の「偏」は、かたよる・助けるなどの「偏」の字の意味から来ているのであろうか。

把一盞酒淹一半在階基上 (元曲：玉鏡臺，一折)

(私〈温嬌〉は杯の酒の半分を床にこぼしてしまった)

小廝把銀子鑿下七錢五分 (金瓶梅：23回)

(小者〈玳安〉は、銀の塊を七錢五分の分だけ切り取って)

これらの例は「把」字の目的語が名詞の全体を現わし、動詞の後ろにそれに

属する部分の量詞が付加されている。

この文型は、必ずしも「把」字を使わなくてもよいとする。

- (2) 動量目的語（これは呂叔湘の用語であり、文法家によっては動量補語と分類するものもある）

動詞と動量詞が同じ形の例。

天熱，把外頭的衣裳脫脫罷 （紅樓夢：31回）

（〈賈母が、史湘雲に〉暑いから外着をちよと脱ぎなさいくと言った）

動詞と動量詞が同じ形でない例。

把馬打上兩柳條 （水滸傳：5回）

（〈桃花山の大王は〉馬を二鞭，柳の枝の鞭で叩いた）

この文型は、必ずしも「把」字を使わなくてもよいとする。

- (3) 保留目的語（原文は「保留賓語」であるが、適当な訳語が見つからなかった。）

呂叔湘は、保留目的語は普通の目的語に比べて動詞との関係が密接であるため、普通の目的語を「把」字の力を借りて前に移動させ、保留目的語を動詞の後に置いて密着させているとする。

保留目的語と動詞との関係が密接で、複合動詞のようにになっている例。

沒事尚自生事，把人尋不是，更何況今日將牛畜都盡失

（劉知遠諸宮調：第2）

（〈李洪義らは〉何もなくても事をかまえ、私〈劉知遠〉のあらを探す、まして今日家の牛馬を火事で皆逃がしたとなれば）

保留目的語が結果目的語（結果補語）になっている例。

把我這一個設口樣圓鬪的淺盆，可早是打一條通長甕 （燕青博魚：2折）

（私〈燕青〉の口の広い丸い盆に、早くも一本の長いひびを入れやがって）

二つの目的語の間に、所属関係があり保留目的語が「把」字目的語に所属している例。

把妮子縛了兩只手 (清平山堂話本, 簡貼和尚)

(〈皇甫松〉は下女の二本の腕を縛った)

「把」字目的語が、場所を示している例。

把春臺揩抹了灰塵 (水滸傳: 6回)

(〈魯智深は、食卓のごみを拭いた〉)

これらの文型は、「把」字を必ず使わなければならない。

(4) 間接目的語 (原文は「受事補語」)

動詞の後ろに「給」を使わない例。

把相牛經, 種魚法, 教兒孫 (辛棄疾: 行查子, 博山戲呈趙昌甫, 韓仲止)

(よい牛を見抜く方法と魚を養殖する方法を子孫に教えよう)

動詞の後ろに「給」を使う例。

將東西且交給周瑞家的暫且拿著 (紅樓夢: 74回)

(〈王熙鳳は〉その粒銀を周瑞の女房に渡してしばらくもって行かせた)

この文型は、「把」字を必ず使わなければならない。

(5) 場所目的語

場所目的語の例

把山海似深恩掉在腦後 (董解元西廂記: 卷3)

(〈崔夫人は〉命を助けてもらった山よりも高く海よりも深い恩を忘れて)

(6) 方向補語やアスペクト助詞

方向補語の例

婆婆把茶點來

(京本通俗小説: 碾玉觀音, 警世通言: 卷8 崔待詔生死冤家)

(老婆がお茶を点じた。)

アスペクト助詞の例。

只有小娘子見丈夫不要他，把他休了 (清平山堂話本：簡貼和尚)

(若い妻は夫〈皇甫松〉が自分を拒絶して、離縁したことを知り)

この文型は、必ずしも「把」字を使わなくてもよいとする。

(7) 結果補語

「得」のない結果補語。

把窗兒紙，微潤破，見君瑞披衣坐 (董解元西廂記：卷4)

(紅娘は窓の紙につばをつけて破り、中を見ると張君瑞が着衣で座しているのが見えた)

この文型は、必ず「把」字を使わなければならない。

(8) 結果補語

「得」のある結果補語。「得」は近世の文章中では「的」や「个」と書かれることもある。

將來讀書人既有此一條榮身之路，把那文行出處都看得輕了

(儒林外史：1回)

(これから読書人が科挙という栄達の道ができると、学問・道徳・出
処・進退という大切なことを軽視するようになるだろう)

この文型は、必ず「把」字を使わなければならない。

(9) 特殊な結果補語

この構文は特殊なもので、二類に分けられる。

最初の一類の構文の動詞は(大部分は心理活動に関する動詞)、本来自動詞であるが、使役の意味となって他動詞的なものとなる。後ろの補語は「得」や「个」と接続し、一字の場合は必要としない。

一字の例である。

猛可里抬頭把他觀覷了，將我來險笑倒 (元曲：忍字記，1折)

(急に頭を上げて彼を見ると、私を危うく笑い転げさせる)

「得(的)」の例である。

把月娘玉樓見了喜歡的要不得

(金瓶梅：41回，呂叔湘は「要不得」を「了不得」に作る)

(〈子供二人の遊ぶさまは〉呉月娘・孟玉楼をすっかり大喜びにさせた)

もう一つの類は、起源は古いが、大量の発展は現代になってからである。

「把」字の目的語は、結果補語が表す結果の手段に過ぎない。

最無端處，總把良宵，祇恁孤眠卻 (柳永：尾犯)

(最も辛いのは、結局この良き夜を一人寝たこと)

把一块手絹儿全部哭湿了 (白話聊齋)

(一枚のハンカチを皆泣きぬらした)

(10)意外なことの場合

「把」字句の文を受身のように使い、意外なことが発生した場合に使う。動詞の後ろに何かの成分が必要で、ない場合は少なくとも「了」の字が必要。

誰承望馬嵬坡塵中，可惜把一朵海棠花零落了 (元曲：梧桐雨，4折)

(馬嵬の坂の土の中、あたら一つの海棠の花のごとき楊貴妃を殺されてしまった)

この文型は、「把」字を必ずしも使わなくてもよいとする。

II 動詞の前に付加される成分

(1) 「一」

動詞の前に「一」をつける。本来は「動詞」+「数量詞」の形で、「一拉」は「拉一拉」の省略縮約形式である。しかし量詞が普通の動詞のように使われているので、(2)動量目的語と別に項目を立てる。

山前行看著靜山大王，道聲與獄子，把枷梢一紐

(清平山堂話本：簡貼和尚)

(山定は靜山大王を見て、獄卒に「首かせを締め上げよ」と言った)

この文型は、「把」字を必ずしも使わなくてもよいとする。

(12) 「都」と「也」

動詞の前に「都」や「也」を付加する。「都」字は、一つの特徴があるとする。「都」字は関係する名詞の前に位置するということである。「也」字も同様である。

「都」字の例である。

魯達焦躁便把碟兒盞兒都丟在樓板上 (水滸傳：3回)

(魯達はいらいらして、皿だの杯だの皆床板にほうり捨てた)

「也」字の例である。

你窮再少下人錢債，割了你窮耳朵，剗了你窮眼睛，把你皮也剗了

(元曲：魚樵記，2折)

(お前〈朱買臣〉がこれ以上他人に借金したら耳をちぎって、目をくり貫いて、皮もはいでやる)

この文型は、必ず「把」字を使わなければならない。

(13) その他

「都」「也」以外にもいくつかの副詞が動詞の前に位置することができる。まずはいくつかの「都」と近い意味の副詞である。「逐件」の例である。

老太太聽了，把細磁碗盞和銀鑲的杯盤逐件看了一遍 (儒林外史：3回)

(隠居のおばあさんはそう言われて、上等の磁器と銀メッキの食器を一つ一つ眺めました)

また「往」字を使い、場所補語を引き出す例もある。

晴雯伸手把寶玉的襖兒往自己的身上 (紅樓夢：77回)

(晴雲は手を伸ばして、宝玉が掛けてくれた綿入れを、自分の方に引き寄せた)

また、「把一做一」や「把一当一」などの構文もある。

哎、怎把這雙老爹娘做外人看待 (元曲：合汗衫，3折)

(ああ、どうしてこの老いぼれたじい〈張義〉とばあを赤の他人のように見るのか)

以上見てきたように、「把」字式は最初は特殊な用途のある構文ではなかった。しかし近代になると広く応用されるようになったのは、ある種の状況が目的語を前に移動させなければならなかったからである。同時に「把」字式には、二つの消極的制限があった。第一は目的語は必ず特定のものであること、第二は動詞が必ず「作為」「処置」の意味を表していなければならないということであった。

(ふくみつ・まさひろ 経営学部教授)